



宇部興産株式会社

2021 年度第 1 四半期決算説明会

2021 年 8 月 3 日

イベント概要

[企業名]	宇部興産株式会社
[企業 ID]	4208
[イベント言語]	JPN
[イベント種類]	決算説明会
[イベント名]	2021 年度第 1 四半期決算説明会
[決算期]	2021 年度 第 1 四半期
[日程]	2021 年 8 月 3 日
[ページ数]	23
[時間]	18:00 – 18:47 (合計：47 分、登壇：21 分、質疑応答：26 分)
[開催場所]	電話会議
[登壇者]	1 名 取締役 常務執行役員 CFO 藤井 正幸 (以下、藤井)

登壇

司会：投資家の皆様、こんばんは。本日はお忙しい中、宇部興産株式会社の電話会議にご参加いただきまして、ありがとうございます。

これより、取締役常務執行役員 CFO、藤井正幸より、2021 年度第 1 四半期連結決算について約 20 分間ご説明申し上げたあと、質疑応答を行います。会議全体の時間は 45 分を予定しております。

電話会議を始めます前に、皆様にお断り申し上げます。これから行う説明におきまして、現時点の予想にもとづく将来の見通しを述べる場合がございますが、それらは全て、リスクならびに不確実性を伴っています。皆様には、実際の結果が見通しと異なる場合があることをあらかじめご了承ください。

それでは、決算説明を開始いたします。藤井常務、よろしくお願いいたします。

2021年度 第1四半期連結決算



連結対象会社

項目	2020年度末 (A)	2021年度 第1四半期末 (B)	増減 (B) - (A)	摘要
連結 子会社数	66社	66社	0社	
持分法 適用会社数	26社	27社	1社	+ C統合準備株式会社
計	92社	93社	1社	

藤井：みなさん、こんばんは。宇部興産の藤井でございます。本日はお忙しいところご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

それでは、早速ですけれども、本日発表いたしました2021年度第1四半期の連結決算につきまして、お手元の資料に沿ってご説明したいと思います。よろしくお願いいたします。

資料の右下にページ番号が振っております。まず、3ページのスライドでございます。

連結対象会社は、第1四半期末で連結の子会社数が66社となり、前期末から変わっておりません。

持分法の適用会社は1社増えまして27社。増えた会社は適用欄に記載しておりますけれども、C統合準備株式会社です。セメント等の事業統合を来年の4月に行いますけれども、それに向けて統合の準備、受け皿になる会社を三菱さんと折半で設立をいたしました。こちらが持分法の会社として新たに加わってまいりました。第1四半期の業績に特に大きな影響はございません。

2021年度 第1四半期連結決算



環境要因

項目			2020年度 第1四半期 (A)	2021年度 第1四半期 (B)	差異 (B) - (A)	
為替レート		円/\$	107.6	109.5	1.9	
資材価格	ナフサ	CIF	\$/t	306	601	295
		国産	円/KL	24,900	47,700	22,800
	ベンゼン (ACP)		\$/t	358	933	575
	豪州炭 (CIF)		\$/t	76.0	130.3	54.3
			円/t	8,179	14,261	6,082

4

続いて、4ページのスライド、環境要因です。

為替レートは、去年の第1四半期に比べますと、若干円安で推移をしております。

それから、ナフサ、ベンゼン、石炭等資材価格ですけれども、昨年の第1四半期はコロナの影響もございまして、こうした資材価格が大きく下落いたしました。そこから今足元、価格が上がってきております。ですから、これらナフサ、ベンゼン、石炭等は、昨年の第1四半期に比べると大きく価格が上昇したところがございます。この第1四半期の実績は、われわれが期初に想定した水準よりも上回って推移をしているところです。

2021年度 第1四半期連結決算



主要項目

(単位：億円)

項目	2020年度 第1四半期 (A)	2021年度 第1四半期 (B)	差異 (B) - (A)	増減率
売上高 ^{*1}	1,361	1,462 (1,649)	101 (288)	- (21.2%)
営業利益	△ 6	89	95	-
経常利益	△ 12	89	102	-
親会社株主に帰属する 四半期純利益	△ 13	47	60	-

*1: 2021年度より「収益認識に関する会計基準」等を適用しているため、売上高の対前期増減率は記載しておりません。
()は「収益認識に関する会計基準」等の影響を考慮しない場合の参考値です。

5

続いて、5 ページ、主要項目でございます。

売上高は、終わった第1四半期、1,462 億円。今年度から会計基準が変わっております。下の方に注書きがございますけれども、収益認識に関する会計基準の影響を考慮しない従来ベースの数字をご参考までに、括弧でお示しをしております。

売上高は、新しい会計基準で 101 億円の増収。従来ベースですと 288 億円、2 割強の増収になります。

営業利益は 89 億円、昨年は赤字、マイナス 6 億円でございました。黒字に戻して、95 億円の増益でございます。

経常利益は 89 億円、同じく前年同期に比べると 102 億円の増益。

親会社株主に帰属する四半期純利益は 47 億円で、60 億円の増益で着地をいたしました。

昨年第 1 四半期は、コロナの拡大に伴いまして需要が急減しました。これに加えまして、アンモニアの定修年ということもありまして、業績は大きく悪化した。利益項目が全て赤字になったのが昨年の第 1 四半期でした。

昨年の下期以降、急速に状況回復に向かっております。この第 1 四半期の利益がコロナ前の 19 年度の第 1 四半期を上回る水準に回復をしているところでございます。

2021年度 第1四半期連結決算



セグメント別 売上高/営業利益

(単位：億円)

	セグメント	2020年度 第1四半期 (A)	2021年度 第1四半期 (B)	差異 (B) - (A)	増減率
売上高	化学	525	767 *1 (788)	241 (262)	- (50.0%)
	建設資材	691	487 (661)	△ 204 (△ 30)	- (△ 4.4%)
	機械	167	214 (205)	47 (38)	- (22.8%)
	その他	7	8 (8)	0 (0)	- (13.0%)
	調整額	△ 31	△ 14 (△ 14)	16 (16)	- -
	計	1,361	1,462 (1,649)	101 (288)	- (21.2%)
営業利益	化学	△ 27	76	103	-
	建設資材	19	6	△ 12	△ 65.6%
	機械	2	7	4	196.8%
	その他	0	0	0	88.4%
	調整額	△ 1	△ 2	△ 0	-
	計	△ 6	89	95	-

*1: ()は「収益認識に関する会計基準」等の影響を考慮しない場合の参考値です。

6

続いて、6 ページのスライド、セグメント別の売上高/営業利益、内訳でございませう。

化学、機械のセグメントは増収増益になりましたけれども、建設資材のセグメントが減収減益になっております。

売上高は、新しい会計基準で 101 億円の増収と申し上げました。内訳としまして、化学で 241 億円の増収になります。建設資材は 204 億円の減収になりますけれども、この中には会計基準の影響が大きく含まれております。ただ、会計基準の影響を考慮しない従来ベースでいっても、30 億円の減収になっているところですよ。それから、機械につきましては、47 億円の増収ですよ。

ン、ラクタムの増加分が大きいところです。数量が増えておりますし、価格の方も先ほど申しましたように、大きく改善をしている状況です。

それから合成ゴムは43億円の増収。こちら也需要が非常に堅調に戻ってきているところです。

機能品で14億円の増収。これも全般的に各製品とも前年同期に比べると売上が伸びているというところ。

医薬はマイナスの2億円で若干減収でございますけれども、これは出荷のタイミングによるところでございます。

それから下の段、営業利益ですけれども、トータルで103億円の増益になっております。

内訳としましては、ナイロン・ファインで81億円の増益、ここの利益の改善が非常に大きく牽引をしているところでございまして、ナイロン、ラクタムのスプレッドが大きく改善をしているといったところ。

それから工業薬品につきましては、アンモニアの定修がない年ですので、数量も増え、価格の方も改善が進んでいる。それから、ファインケミカルにつきましても、需要が戻ってきているといったところです。

それから、合成ゴムで11億円の増益、これも増収に伴う増益になります。

機能品で8億円の増益、これも各製品とも利益は伸びております。

医薬は、売上は若干減収でしたけれども、利益は若干プラスに働いているところです。

右の方ですけれども、価格差で34億円のプラス要因、ナイロン、ラクタムの価格の改善が大きいところです。スプレッドの改善です。

それから、数量差ですけれども、53億円のプラス要因。数量差はほとんど全般的に全製品プラスに働いております。ナイロン、ラクタムもそうですし、工業薬品、合成ゴム、セパレータ、ファインケミカル等々でプラスが積み上がっているところです。

それから、固定費ほかで17億円のプラス。この中にはアスタリスク2番ということで、在庫評価差、低価格の影響を含んでおります。これらの影響は軽微でございますので、固定費の中で人件費、補修費等のプラスが出ているというところです。

それから建材・石灰石関連は、宇部マテリアルズの製品等回復をしてきておりますので、プラスに働いているところです。一方、石炭等は若干減。電力は先ほど申しましたように IPP の定修の影響で大きく減収をしているところです。

それから営業利益、下の段ですけれども、トータルとして 12 億円の減益になっております。

内訳、セメント・生コンですけれども、利益は前年同期に比べると 5 億円ほどプラスになっております。先ほど申しました、セメントの内需の低迷部分、数量は減少している部分等々ありますけれども、一方で固定費は減少し、生コンは数量増えております。こうしたプラス要因でカバーをしているところです。

一番下の電力でマイナス 21 億円。先ほど申しました IPP の定修の影響です。当初から IPP の定修は計画しておりましたので、計画には織り込み済みですけれども、定修期間が少し延びたことで、このマイナスが少し膨れたところです。

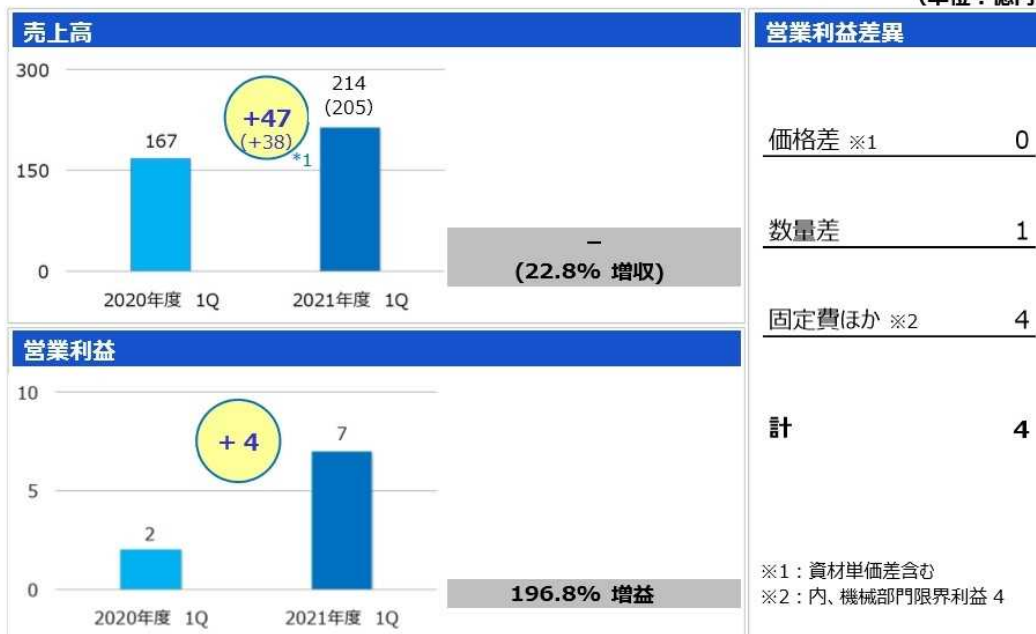
右に価格差、数量差、固定費がございますけれども、価格差でマイナス 10 億円です。セメントの輸出、国内の構成差等、あるいは売電価格の下落分。石灰石製品、宇部マテリアルズの製品の価格はスプレッドが少し悪くなっております。こうしたマイナス要因が積み上がっているところ。

それから、数量差はゼロになっておりますけれども、これは内訳としまして、増えたもの、減ったものがございます。生コンとかあるいは石灰石関連の製品は数量が増えておりまして、プラスが出ております。一方で、セメントですとか IPP、売電の数量のマイナスが相殺されて、トータルとしては影響ゼロになっているということです。

それから、固定費はマイナスの 3 億円です。IPP の補修費によりまして、固定費としてマイナス要因大きいところがございますけれども、そのほかの固定費のところの減少で、ある程度カバーされている状況です。

差異分析 機械

(単位：億円)



*1: ()は「収益認識に関する会計基準」等の影響を考慮しない場合の参考値です。

10

続いて、10 ページのスライド、機械になります。

機械部門でございますけれども、昨年度コロナで落ち込みました自動車関連の設備投資案件の引き合いとか受注も回復しつつあります。ただ、まだ回復途上といった状況です。終わった第1四半期では、特に産機で進行基準案件が順調に進捗したこともありまして、売上、利益は増加しております。

また、売上面では製鋼品、原料のスクラップ価格が高騰しまして、製品の価格も上がっていることで、増収にはこの影響が出ているところでございます。

そうした中で、機械部門、売上高は47億円の増収。先ほど申しましたように、産機ですとか製鋼品の増収が効いている。

それから、営業利益は4億円の増益になっております。こちらは産機の進行基準の進捗等による増収に伴う増益が効いているところ。

右の方、価格差、数量差、固定費ほかでございますけれども、価格差、数量差は製鋼品のものでございます。機械の製品等につきましては、固定費ほかのところでは限界利益のプラス4億円が入っているところでございます。

営業利益～四半期純利益

(単位：億円)

項目	2020年度 第1四半期 (A)	2021年度 第1四半期 (B)	差異 (B) - (A)
営業利益	△ 6	89	95
営業外損益	△ 6	0	6
金融収支	2	3	0
持分法投資損益	0	1	1
為替差損益	△ 2	0	2
その他	△ 7	△ 5	1
経常利益	△ 12	89	102
特別損益	4	△ 0	△ 5
税金等調整前四半期純利益	△ 7	88	96
法人税等・非支配株主利益	△ 5	△ 41	△ 35
親会社株主に帰属する四半期純利益	△ 13	47	60
1株当たり四半期純利益	△ 13.16円	47.31円	60.47円

11

続いて、11ページのスライドですけれども、営業外損益以降をご覧くださいしております。

この第1四半期、営業利益は89億円でしたがけれども、営業外損益はトータルとしてはゼロといったところです。昨年度と比べますと、6億円ほど改善でございます。

内訳としまして、持分法投資損益が1億円のプラスになっておりますけれども、化学関係の持分法の会社が業績改善しております、持分としてのプラスが出ております。

一方で、建設資材の統合準備会社でコストが発生しております。それらとある程度相殺されたような形になっているところです。

こうした営業外損益を加えまして、経常利益が89億円。特別損益は第1四半期、特に大きなものはございませんでした。昨年度、第1四半期、若干グループ会社の再編に伴いまして、会計上のプラスが出たことがございますので、それと比べると5億円ほど悪化している状況です。

下から2番目、親会社株主に帰属する四半期純利益は、47億円に落ち着いたところでございます。

貸借対照表

(単位：億円)

項目		2020年度末 (A)	2021年度 第1四半期末 (B)	差異 (B) - (A)
資産	流動資産	3,317	3,281	△ 35
	固定資産	4,378	4,346	△ 31
	合計	7,697	7,629	△ 67
負債	有利子負債	2,147	2,043	△ 103
	その他負債	1,743	1,833	90
		3,890	3,877	△ 13
純資産	自己資本 *1	3,590	3,538	△ 51
	非支配株主持分他	216	213	△ 3
	計	3,806	3,752	△ 54
負債・純資産合計		7,697	7,629	△ 67

*1:「自己資本」…純資産から新株予約権と非支配株主持分を除外したもの

12

続いて、12 ページのスライド、バランスシートの項目をお示ししております。

総資産につきましては、第1四半期末 7,629 億円、前期末の3月末と比べまして、若干資産が圧縮されている状況でございます。

負債ですけれども、有利子負債が 103 億円ほど圧縮しまして 2,043 億円で、これは現金の保有を少し落としているところです。

それから、純資産の自己資本です。終わった期で 3,538 億円、前期末と比べまして 51 億円ほど減少しております。四半期純利益は 47 億円ほどプラスがございました。

一方で、前年度の期末配当の支払、それから上限 100 億円で、今自社株の取得を行っております。これの半分弱がこの第1四半期に進捗しております。そういったところで 51 億円ほど第1四半期の中で自己資本が減少したところでございます。

キャッシュ・フロー計算書

(単位：億円)

項目	2021年度		
	2020年度 第1四半期	第1四半期	
A.営業活動によるCF	181	143	税金等調整前四半期純利益 88 減価償却費 90 運転資金の増減 △39 他
B.投資活動によるCF	△ 96	△ 92	有形・無形固定資産の取得 △94 他
フリー・キャッシュ・フロー (A+B)	85	50	
C.財務活動によるCF	35	△ 197	有利子負債の増減 △107 配当金の支払 △46 自己株式取得 △43 他
D.現金及び現金同等物の増減 (含、換算差額等)	129	△ 146	
E.現金及び現金同等物の四半期末残高	535	650	

13

続いて、キャッシュ・フロー、13 ページになります。

営業活動によるキャッシュ・フローは 143 億円で、前年度に比べますと少し減っております。これは運転資金が増加したところでございます。

それから、投資活動によるキャッシュ・フローは 92 億円のキャッシュアウト、昨年度とほぼ同等で、差し引きフリーキャッシュ・フローは 50 億円になっております。

財務活動によるキャッシュ・フローですけれども、こちらはマイナスの 197 億円。有利子負債の削減で 100 億円強、それから配当の支払、自己株の取得でキャッシュアウトが出ているところで

第 1 四半期中で現金および同等物の増減ですけれども、146 億円ほど減少しまして、期末の残高は 650 億円になったところでございます。

第 1 四半期の決算の概況は、以上でございまして、今回、業績予想については、期初の業績予想を据え置きとさせていただいております。

第1四半期等で、上振れ下振れございますけれども、上期につきましてはかなり堅調に推移していると見ております。けれども、下期の状況をもう少し見極めたいところもございますので、今回は据え置きにさせていただいたところでございます。

駆け足でしたけれども、私からのご説明、以上でございます。

司会：ありがとうございました。

質疑応答

司会：それでは、これから質疑応答に入ります。ご質問の順番が来て、司会者よりお名前を呼ばれましたら、会社名、お名前の後にご質問をお願いいたします。なお、ご質問につきましては、一問一答形式をお願いいたします。また、多くの方からのご質問にお答えするために、お一人様1回につき2問まででよろしくお願いいたします。それでは、質疑応答を開始いたします。

では、A証券のA様、ご質問をお願いします。

A：Aでございます。よろしいでしょうか。

藤井：よろしくお願いいたします。

A：では、2問よろしくお願いいたします。まず化学の順調な回復、おめでとうございます。200億円が最低線とおっしゃっていたので、しっかりした回復だと評価しておりますが、化学の回復の背景についてももう少し詳しくお願いします。

ナイロン・ファインで81億円の改善ですが、スプレッドの改善で見るとラクタムマージンはおそらく450ドル/トン程度の改善ですので、ナイロンがさらに良くなった、また自動車関連の拡大があったのではないかと推測しますが、このナイロン・ファインの改善の背景について、ナイロン側とファインに分けて、もう少し詳しく教えていただきたい。

機能品はセパレータも良かったということですので、セパレータが良かった背景についてもお願いします。化学の増益要因について、詳しくお願いします。

藤井：まず、ナイロン・ファインでございますけれども、非常に大きな増益改善になっております。中でもご認識の通り、ラクタム、ナイロンの改善が大きいところでございます。ラクタムのスプレッドにつきましては、これはもうご案内の通りかと思っておりますけれども、このところずっと1,000ドルを超える状況で、この第1四半期は推移したところがございます。

それからナイロンですけれども、非常に需給が締まっております。昨年度の第1四半期は、コロナにより需要減が激しかったですが、その中でも食品用途を中心として、フィルム向けは比較的堅調でした。

一方で、自動車向けを中心とするコンポジットが大きく悪化していたという状況でございましたけれども、昨年の後半以降、自動車関係は急速に回復をしております。足元ではナイロン66の代替需要等も増加してきており、あるいはフィルム用途も堅調な食品用途に加えまして、電池の外

装品といったところの需要等も拡大をしている。こうした堅調な需給バランスを背景としまして、原料価格、ラクタムの価格も上がっているけれども、この高騰分を上回って価格の是正ができており、ナイロンとしてのスプレッドも拡大をしているというところですよ。

特にスペイン、タイといった海外で大幅にスプレッドが改善して、増益に寄与しているところがございます。

一方でファインケミカルですけれども、こちら自動車関係を中心にして需要は改善をしております。ただ、ラクタム、ナイロン等と比べると、増益幅はそこまで大きくはないですが、こちらでも確実に増益となっているところがございます。

それから、セパレータでございますけれども、昨年の第1四半期は自動車向けで大きく需要減退の影響を受けておりましたので、昨年度の第1四半期に比べますと、数量は、塗布型、無塗布型とも増加しております。トータルで9割近く数量は増加したというか、回復したところがございまして、堅調に拡大は進んできている認識でございます。

A：9割近く改善ということは、セパレータは1.9倍になったということによろしいですね。

藤井：数量として、そういうことです。それだけ昨年の第1四半期が落ち込んだということでもございます。

A：塗布型、無塗布型で跛行性がありますか。また、ナイロン、ラクタムマージンも改善とのことですが、これはコンパウンドが伸びたことも背景にありますか。確認させてください。

藤井：塗布型、無塗布型での跛行性と申しますか、第1四半期同士を比べますと、比率としては似たような比率で伸びているところがございます。それまでの経過でいきますと、途中経過は四半期によって、どっちが増えた、どっちが減ったという部分がございましてけれども、1年前と比べるとほぼ同じような形といったところですよ。

それから、ナイロンのマージンの改善ですけれども、こちらはフィルム向けポリマーもコンポジットも改善をしているところですよ。比率がどうという細かいデータはございませんけれども、元々フィルム向け、食品向けは昨年のコロナの中でも比較的堅調に推移しておりましたので、昨年度からの変化分ということで見ると、コンポジットの方が大きく改善していると言えるかもしれません。

A：分かりました。ありがとうございます。もう1点、簡単をお願いします。建設資材のセメントですが、内需が第1四半期で920万トンということで、本当に落ち込んでいるわけですが、そういう中で、石炭価格も上がりつつ、セメント・生コンが増益要因になっているのは、生コンの数量増が大きいのか、石炭などの変動費以外のコスト削減が大きいのか、こういった要因でしょうか。

藤井：セメント・生コンで申しますと、セメントは今ご案内の通り、数量的には、前年に比べると1.8%ほど内需が減っているところです。この辺り、輸出を増やして、トータルの数量としてはなんとかカバーするような形はしておりますけれども、価格の構成差ということでは、多少影響を受けている部分があるということです。

それから、石炭の価格も足元上がってきておりますけれども、こちらにつきましては、まだ第1四半期は前年度から繰り越しの在庫等もありますので、それほど大きな影響はなかった。まだ限定的であったとは言えます。

一方で、セメントでも昨年度の第1期と比べると補修費等が減り固定費が減っている部分や、生コンでは数量増といったプラス要因がございますので、それらをトータルすると、マイナス要因はありますけれども、プラス要因の方が上回ったということでございます。

A：コストダウンというのは、補修費等が減っているのでしょうか。

藤井：そうです。固定費が基本的には減って、プラスに働いているというところです。

A：5億円のうち、寄与としては半々でしょうか。取引条件がマイナスなどありますので一概に言えないでしょうか。

藤井：内訳の比率等々は少しお示しすることが難しいです。

A：分かりました。ありがとうございます。

藤井：ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。次に、B証券株式会社、B様、ご質問をお願いいたします。

B：Bです。どうぞよろしく申し上げます。

藤井：よろしくをお願いいたします。

B：1点目です。今の続きで、建設資材の電力についてご説明いただければと思います。1Qの営業利益がYoYで21億円の減益ということですが、出来れば数字で、難しければ定性的でも結構ですので、価格差、数量差、固定費差のどの要因で大きくマイナスになっているのかをご説明いただくと、先ほどのセメント・生コンのところの理解がより進むと思いますので、電力について要因に分けて教えていただけますでしょうか。お願いします。

藤井：電力について、具体的な数字はお示しが難しいですけれども、定性的に申しますと、価格差はマイナス要因になっております。これは売電の価格が、昨年の第1四半期に比べると下がったこ

とで、少しマイナス要因になっている。それから数量差は、定修がございまして、数量は大きく昨年の第1四半期に比べると減少しているというところで、マイナスが入っております。

それから、その他固定費も定修に伴いまして、補修費等でマイナスが増えているところがございますので、そういった意味では、それぞれの要素が減益要因になっているところです。

今年度、定修があることは当然ながら計画をしておりますので、当初の業績予想の中にも織り込みはしておりますけれども、定修の期間中に設備の不具合が見つかって、若干期間を延ばしたことで、マイナス影響が少し膨らんだところがございます。そうは言っても、ある程度限定的な水準でございます。

B:最後の設備の不具合のところは、どの程度の追加のコストアップになり、いつごろ通常に戻っているのかについても、もしよろしければ教えてください。

藤井:第1四半期中には戻って、当然ながら稼働に移っております。具体的な影響額を申し上げることは難しいですけれども、限定的な影響額であったというところがございます。

B:それから2点目、化学の機能品のところを教えてください。短信にて、YoYでの増益は電池材料の影響が大きいと記載があったと思いますが、これは間違いないでしょうか。

第4四半期との比較の場合では、電池材料はどういう方向感でしょうか。また、ポリイミド等はQoQで見た場合にはどうなっているのかという辺りについても、少し補足をお願いいたします。

藤井:機能品ですけれども、昨年の第1四半期との比較で申しますと、増益になっております。内訳として、電池材料は、もちろん自動車関係は需要が回復してきたということで、プラスに働いております。ポリイミド、あるいはセラミックスといった機能品も、昨年に比べればということですが、堅調に数量回復してきている。ポリイミドは昨年コロナの中でも堅調に推移しておりましたけれども、そこと比べても増益になっているので、全般的に増益に寄与しているというところではあります。

それから、昨年度の第4四半期との比較で申しますと、昨年の第4四半期からは、機能品としては利益が減少していますけれども、昨年第4四半期で、特にポリイミド関係ですと、上期等々からのずれ、回復の部分と、今期との入り繰り、コストのずれ等といったところもありました。それだけでもないですけれども、機能品としては利益が第4四半期に少し通常よりも膨れて出ている感じがございましたので、そこと比べると、第1四半期は機能品としては利益が減少したというところではあります。

特に大きな要因でどうということはありませんけれども、基本的には機能品の各製品で少しずつ第4四半期からは売上減少している。数量は同じぐらいではありますけれども、そういった影響も出ているところでございます。

B：第4四半期との比較で、セパレータも若干減益になっているという理解が正しいですか。

藤井：第4四半期との比較でいくと、ほぼ第4四半期並みでございます。

B：理解出来ました。ありがとうございます。

藤井：ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。次に、C証券株式会社、C様、ご質問をお願いいたします。

C：Cです。よろしくお願いいたします。

藤井：よろしくお願いいたします。

C：私も機能品について、追加でご質問です。4Qとの比較で言うと、先ほどのご回答から、ポリイミドは少し強すぎた反動減で、おそらく減収減益かと思いますが、これは単純に出荷が出過ぎた反動だという見方でよろしいでしょうか。お客さんの在庫調整、あるいは減産という話なのか。あるいは単価のダウン、競合がシェアを拡大しているのか。価格、数量、シェアといったところについて補足いただけますでしょうか。

藤井：機能品の第4四半期との比較ですが、一言追加させていただきますと、電解液の売上が、昨年度下期に三菱さんと合弁体制になりまして、当社としては持分法になったわけですが、お客様の認定取得までに少し時間かかりますので、その間は当社経由で販売といったようなものもございまして。そうしたものがこの第1四半期からは、収益認識会計基準でネッティングされたといった影響もございまして、売上にはそういった電解液部分の影響も若干含まれているところでございます。

それから利益で申しますと、3カ月という短い単位で見ますと、プラスマイナスの中の利益の寄り戻しが出てきている部分がございますけれども、特に市場あるいはお客様の方で大きな影響があって、減収につながっているというわけではないという理解です。

ただ、ポリイミドに関しまして、ワニス関係で、ディスプレイの表示用の半導体不足ということもございまして、若干この辺り影響を受けている部分はあるように聞いております。それほど大きなものではありません。そういったものはございますけれども、特に大幅な変動要因があったということではございません。

C：ありがとうございます。そうすると、端的に4-6月は少し減ったけれども、価格も含めて、2Q以降はそれほど心配なくていいという見方でよろしいでしょうか。

藤井：はい。第2四半期以降も、需要は堅調に推移していくと全般的に見ております。先ほど申しましたワニスに関連して、半導体不足とか、そういった影響が多少の懸念はございますけれども、それほど大きなものではないと見ております。ですから、数量は堅調に推移するだろうという見通しでございます。価格につきましては、こういう機能品ですので、定常的に価格は値下げ圧力で下がっていくという前提で考えておりますけれども、ただ、それも大きなマイナス要因ではなくて、一定程度、想定範囲内という見通しでございます。

C：ありがとうございます。2点目、機械事業ですけれども、売上と利益はしっかり戻っていると思います。受注については、昨年前半が悪く、後半から戻ってきたような状況だったと思いますが、今期に入って、受注の動きについて、前期の下期との比較でどのような状況か教えてください。

藤井：機械の受注の状況ですけれども、成形機関係で言いますと、自動車関係で受注は回復傾向が継続している。特にEV関係ですとか、軽量化の関係の案件が増えてきている状況です。地域差はありますけれども、北米、あるいは中国辺りが堅調に推移をしている。一方で、インドとか東南アジアといった辺りはまだコロナの影響があって、回復にもう少し時間がかかりそうな状況であるというところではあります。

産機ですけれども、こちらはもう既受注の案件で、売上は進捗している。ただ、受注環境で申しますと、IPP関係の案件がピークアウトしているところもございますので、この辺りは今後に向けて受注を増やしていくことが、一つの課題という認識ではございます。昨年度に比べると、この第1四半期は、受注も回復をしてきている認識でございます。

C：以上でございます。ありがとうございました。

藤井：ありがとうございます。

司会：それでは、そろそろお時間近くになりましたので、次の方のご質問を最後とさせていただきます。D証券株式会社、D様、ご質問をお願いいたします。

D：ご説明いただきありがとうございます。D証券のDです。

まず1問目は全体感に関してですが、先ほど1Qで上振れ下振れはあるが、上期は堅調に推移とおっしゃっていました。1Q決算だけを見た時に、御社の想定に対して、特にどの辺りが上振れて、

どの辺りが下振れたのか、全体としては上振れという理解でよいのか、この辺り少しご説明いただけますでしょうか。

藤井：第1四半期の決算で見ますと、化学が全般的に計画よりも回復が堅調に推移しているところがございます。やはりナイロン、ラクタムといった辺りです。ラクタムにつきましては、スプレッドを当初、今年度は900ドルで見えておりましたけれども、第1四半期平均で見ても1,100ドル弱でございますので、この辺りのスプレッドの上振れ分はプラスアルファに働いている認識でございます。その他の製品も、全般的に計画よりも少し上振れて化学品は推移している。

一方で建設資材につきましては、先ほど申しましたIPPの定修期間が若干伸びたところを、少し下振れ要因と見ております。機械は出荷の関係等ございますので、ほぼほぼ計画線というところではございます。そういった中で、トータルとしては計画線を上振れて推移している認識でございます。

D：石炭高の影響は1Qではほとんど効いてこなかったという理解で正しいですか。

藤井：一部コストアップになっていますけれども、影響としては限定的であったということです。

D：分かりました。2問目はカプロラクタムに関してですが、4-6月期は今ご説明がありましたように、かなり堅調に推移していきまして、ただ一方で、今後2カ月間ぐらいの間で、少し増設の多い局面になるのかなと思っております。一方で、もう少し耐えれば需要期に入ってくるようにも思いますので、カプロラクタムの今後の見通しについて少しご説明いただけますか。

藤井：今のご認識の通りだと思いますけれども、こちら地域差がございまして、中国の国内はやや需給が緩んできているといった状況ですけれども、その他の欧州や台湾等の地域は足元でもタイトになっています。需要が堅調ということもございまして、各所で設備のトラブル等で、競合の供給が支障をきたしているような影響も出ているという認識です。

ベンゼンの価格が今期、第1四半期から上昇傾向で推移しているところがございますけれども、ラクタムの価格はそれを転嫁出来ている状況だと認識をしております。ここに来て、さすがに1,000ドルを超えている状況ですので、ある程度頭打ち感が出てきておりますけれども、第2四半期もほぼ足元並みで推移するという認識ですし、ご認識の通り、下期に入れば冬物の衣料の需要期に入りますので、その辺りで当面継続出来るのではないかと見通しているところでございます。

D：分かりました。ありがとうございました。

藤井：ありがとうございます。

司会：他にもご質問をいただいておりますが、終了予定の時間となりましたので、以上で質疑応答を終了させていただきます。なお、本日お受け出来なかったご質問につきましては、明日以降、財

務 IR 部よりご連絡をさせていただきますので、何卒ご了承くださいませよう、お願い申し上げます。

最後に、宇部興産株式会社、藤井常務、一言ご挨拶をお願いいたします。

藤井：今、ご説明しましたように、この終わった第 1 四半期、特に化学部門の大幅な業績改善が牽引した形になっておりまして、計画を上回って推移している認識でございます。今後も当面、全般的に堅調な需要継続と見ております。上期につきましては、化学の上振れが寄与してくることで、全体的にも上振れる可能性が高いと見ております。

一方で下期につきましては、足元なかなか収束しないコロナ感染であるとか、あるいは原燃料価格、石炭の価格の高止まりといった懸念材料もありますので、もう少しこの辺り、見極めをしたいと考えております。こうした足元旺盛な需要がございますので、これをしっかりと取り込んでいきまして、着実な利益の積み上げに努めてまいりたいと考えております。

本日はご参加いただきまして、どうもありがとうございました。以上で私の説明を終わらせていただきます。

司会：以上で電話会議を終了いたします。ご参加ありがとうございました。

[了]